

周囲が十丁ばかりもあらうか、何かの祀が立つてる様子だ。

俺は其の動かない水に太古の静寂を偲んだ。

行く手に雑木林の山がある。

あの山を越すのか、道も六にない。いつのまにか俺は山の中腹に迷ひ込んでゐた。

松林だ。

俺は椎の根本に腰を据えて、ぐつたりして目を潰つた。

芝藪や、菟草の爲に歩るけないのだ。

それに氣が付いて見ると、俺の頭の上に、烏が飛んで鳴き止まない。

俺はもう死に掛けてゐるのか。

繩を松の枝に掛けて首を縊る事は止そう。

不吉な烏はそれを待つてゐるのだ。成程俺の體は屍の匂ひがする。

斯う思つて俺は足を投げ出して仰向に仆れた。

するとガヤ／＼人聲が聞え出した。